

「わたくしは自分自身をシンドラーのリストに書き入れた」 —ヒルデ・ベルガーとロゼ・ベルガーの物語り— (V)

ラインハルト・ヘッセ* 編著

船尾 日出志** 城田 純平*** 今泉 尚子**** 訳

* フライブルク教育大学元教授

** 名誉教授

*** 人間環境大学講師

**** 早稲田大学大学院生

“Ich schrieb mich selbst auf Schindlers Liste”: Die Geschichte von Hilde und Rose Berger. (V)

Reinhard HESSE*,

Hideshi FUNAO**, Junpei SHIROTA*** and Naoko IMAIZUMI****

*Hauptstrasse 23 CH-8280-Kreuzlingen/Bodensee, Switzerland

**Professor Emeritus of Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

***Full-time Lecturer of University of Human Environments, Okazaki 444-3505, Japan

****Graduate student of Waseda University, Tokyo 169-8050, Japan

序

船尾は友人の哲学者ラインハルト・ヘッセ先生より、2014年9月に1冊の本（*Ich schrieb mich selbst auf Schindlers Liste. Die Geschichte von Hilde und Rose Berger*）Haland & Wirth im Psychosozial-Verlag, Gießen 2013）をご恵贈いただいた。意外にも哲学書でなく、艱難辛苦のナチス時代を乗り越えて生き抜いた2人のユダヤ人女性ヒルデとロゼの半生に関するものであった。そしてその本の大部分は2人の女性自身の回顧録およびインタビュー記録から構成されている。目次は次のようになっている。

導入

ベルトホルト・バイツによる序言

ヘッセ先生による序文

I ヒルデ・ベルガーの物語り

テキスト1「ヒルデ・ベルガーが自身の人生（1914 - 1945）を語る」

テキスト2「マーク・スミスのヒルデ・ベルガーとの対話」

テキスト3「ハロルド・ツイリンおよびマリー・ツイリンのヒルデ・ベルガーとの対話」

II ロゼ・ベルガーの物語り

テキスト4「マリー・ツイリンのロゼ・ベルガーとの対話」

テキスト5「クラレンス・マクリモンドのロゼ・ベルガーとの対話」

ヘッセ先生による結語にかわる書簡

この第5報はテキスト2「マーク・スミスのヒルデ・ベルガーとの対話」の一部の翻訳である。このテキストは、ニューヨークのジャーナリストで、そしてヒルデと夫、アレックス・オルゼンの友人であるマーク・スミスが1978年6月に3日連続でヒルデ・ベルガーにたいして行ったインタビューの記録である。マーク・スミスはここでヒルデ・ベルガー（・オルゼン）に1914年の出生から1935年までの人生にまつわるさまざまな出来事について尋ねた。そのテキスト2は原著の59頁から118頁であるが、第5報では62頁から75頁までのおおよそ13頁分を翻訳している。

このような対談の記録ではありがちであるが、いろいろな話題が次々に出てくる。重複もある。時間の流れに厳格に沿った

展開はみられない。とはいえヒルデ自身が語る政治的人間としての育ちの4段階、つまり①シオニズム、②シオニズム・社会主義、③共産主義ないしスターリン主義、④トロツキー主義という流れはふまえられている。ここでは主にシオニズムの段階におけるヒルデの体験が語られている。ドイツの第2帝政末期からワイマル期にかけての時期におけるベルリンに居住するユダヤ人一家の様子が生々しく描写される。

なかでもヒルデが通っていたリュッツェウム（女子高等学校）の同級生であるユダヤ人生徒、アンネマリーの大邸宅についての描写はインパクトがある。アンネマリーはベルリンのなかで超高級地域であるグリュエネヴェルトの大邸宅に住んでいた。ヒルデは同じユダヤ人であるという理由で、同級生たちのなかで唯一誕生日会に招かれたのだ。ヒルデが描写するその大邸宅は本当に豪華である。ヒルデが恥じていたという地下にあったベルガー家の住まいと対比すると、同じユダヤ人といっても、その生活の違いはすさまじい。

第4報でもそうであったように、この第5報で翻訳した部分でも、ヒルデは自身の父親についてかなり辛辣に述べている。ヒルデの父親は超正統派のユダヤ教徒で、新聞も本も一切読まない世間知らずな人物である。家庭内では過保護で、過度の独占欲の持ち主で、専制的であった。ヒルデによって披歴される父親の行動や言動は滑稽でさえある。とはいえ、よく読むと、家族思いで、家族のためなら一心不乱に頑張る父親像も浮かんでくる。ヒルデ自身も、父親に愛され、心配され、ときには誇りに思われていたことは分かっていたのではないだろうか。とはいえ、表面的にはヒルデの父親への言葉は厳しい。母親にたいする深い愛情を感じさせる言葉とは対照的である。

もちろん他にもいろいろ興味深い事柄がヒルデによって語られている。例えば、ヒルデが参加した青年運動などをぜひ、じっくり読んでいただきたい。

ヘッセ先生及び出版社より日本語への翻訳、および愛教大研究報告における発表の許可をいただいている。《 》は原文にある補足説明であり、【 】内は訳者による補足ないし注釈である。

Keywords：シナゴーク (Synagoge), 青年運動 (Jugendbewegung), 超正統派 (Chassiden)

I ヒルデ・ベルガーの物語

2. テキスト2 マーク・スミスのヒルデ・ベルガーとの対談 (1978年6月19日～21日)

(承前)

マーク：子どものヒルデ・ベルガーちゃんはいつ、自分の人生が、あなたの父であるナタン・ベルガーのお店や学校を超越するものであると意識したのでしょうか？

ヒルデ：そのご質問には、ごく簡単に答えることができます。あなたのために、わたくしの成長過程を描写しましょう。わたくしの成長過程はユダヤ教の会堂であるシナゴークで始まりました。シナゴークに、わたくしたちは両親と共に安息日および金曜日に行きました。わたくしたちは、シナゴークによって組織された子どもグループに属しました。そのグループの名は「アーベントハイム」でした。シナゴークは、そのメンバーの子どもたちの世話をする人々を雇いました。その人々は子どもたちに歌唱指導をし、子どもたちとドイツ語やヘブライ語の歌を歌い、そしてダンスを練習させました。わたくしは、「ホラ」【バルカン半島地域由来の輪舞の一種】から練習を始めたこと記憶しています。しかしドイツの民族舞踊、フォークダンスも学びました。ボール遊びをし、子どもらしい遊びをし、さまざまな競技をおこないました。専門教育を受け、報酬を得ていたソーシャルワーカーが、わたくしたち

にかかわってくれました。当時、わたくしは確かに最初の音楽教育を受けていたのです。それはまだリュッツェウムに入学する以前のことでした。わたくしたちは、ハーモニをつけて歌うことを教えられ、カノンもまた教えられました。ドイツの古典音楽さえも学びました。それどころか、一度、わたくしたちはハイドンの子ども向けシンフォニーや「プリンセスとエンドウ豆の物語」という作品のミュージカルバージョンを上演しました。わたくしはかなり良い音楽的な聴覚と美しいソプラノの声をもっていたので、主役のプリンセス役になることができました。その美しい声は、後に喫煙習慣によって失われましたが。

マーク：そのシナゴークの名称と規模を教えてください。

ヒルデ：かなり大きな規模で、そしてその立地場所から「コトプス河岸の寺」との名をもっていました。もちろん、それはヘブライ語の名称も持っていました。その名を、わたくしは忘れてしまっています。我が家から遠くはない場所にありました。徒歩で行ける距離でした。それは決して正統派のシナゴークではなかったです。むしろ、ここアメリカで「保守的なシナゴーク」と呼ばれているようなシナゴークでした。すなわち合唱団がありました。合唱団は正統派のシナゴークでは許されていませんでした。しかし改革派のシナゴークのようにパイオルガンはありませんでした。いずれにせよ、そのシナゴークにはわたくしたち子どもたちのための共同体生活がありました。共同体生活は、も

もちろんそれ以外に、民衆学校にもありました。しかしそこには主に、非ユダヤの子どもたちがいました。

マーク：学校で友だちができましたか？

ヒルデ：はい。たくさん。わたくしのクラスにはもう1人ユダヤ人少女がいました。他は全員、非ユダヤ系でした。そのクラスに何人の生徒が在籍したかは、わたくしはもう覚えていません。－ わたくしはリューツェウム（Lyzeum【中等学校の1つである女子高等学校】）について語っています。

わたくしは先ほど言及するのを忘れましたが、“Lyzeum für höhere Töchter”（中等教育を受ける娘たちのためのリューツェウム）あるいはまた“Lyzeum am Mariannenplatz”（マリアンネ広場のリューツェウム）と呼ばれたそのリューツェウムでは、すべての女生徒が相当に金持ちの家庭出身であったと言っても過言ではありませんでした。すなわち官僚、将校、下級ブルジョアジーおよびそれどころか上級ブルジョアジーの家庭出身でした。

もう一人のユダヤ人生徒もまたひじょうに金持ちの家庭から通っていました。かの女は賢い子どもで、そしてかの女の叔父・叔母の夫婦とベルリンのなかで超高級地域であるグリューネヴァルトにおけるエレガントかつ、大きな邸宅で生活していたのです。その邸宅に、わたくしは一度、かの女の誕生日会に招かれたことがありました。わたくしは11歳か12歳でした。それゆえ、わたくしはかなり興奮し、そしてもちろん悪い気はしませんでした。と申しますのは、わたくしはクラスのなかでその邸宅に招かれた唯一の生徒だったからです（わたくしもまたユダヤ人であったからに違いありません）。クラスのすべての家庭のなかで、わたくしの家庭は間違いなくもっとも貧しい家庭でした。少なくとも、わたくしは授業料を全額は納めていないただ一人の生徒でした。

後に、わたくしの政治意識が成長した後のことですが、実際わたくしの同級生のすべての家庭が政治的に保守的であったし、それどころか反動的であったことに気づきました。たいていの家庭は国家主義的であったし、しばしば排外主義的でした。親たちは（わたくしは後日、知ったのですが）ドイツ国家党に所属し、若干の親はそれどころかナチス党に属していました。学校はドイツ国家党的でした。そのことは授業プログラムの全体において感じられました。わたくしがそれによって、わたくし自身の成長過程のなかでどのように影響されたかについては、後ほどお話しします。いずれにせよ、わたくしはそこにおいて、社会的問題が存在することに気づきました。そしてそのことは後に、社会主義思想にわたくしの心を開かせました。

しかしグリューネヴァルトの邸宅での誕生日会のお話に戻りましょう。わたくしは大邸宅での誕生日会に出席することにひどく興奮し、そして身に付けるべき

服装について母を困惑させました。どのような靴を履いていくべきか。どのようなお祝いの品をもっていくべきか。わたくしの指の爪はひどい状態でした。といいますのも、わたくしは自分の指の爪の手入れをすることがなかったからです。アンネマリーは、それはもう一人のユダヤ人生徒の名前ですが、自分の爪を磨き、そして自分の手をクリームとパウダーで手入れをしていました。わたくしは、かの女の家で外見がどれほど注目されるのかわかりました。わたくしは、かの女がとても洗練され、教養のある家庭出身であることを知りませんでした。確かにクラスでもっとも教養ある家庭出身でした。アンネマリーは、かの女の叔父・叔母に連れられて行ったオペラやコンサートについてわたくしに話してくれました。かの女の家では、音楽の夜会が行われました。それにはベルリンの文化界からさまざまな著名なゲストが参加したのです。その人たちの名前を、わたくしは忘れませんでした。わたくしはそれらの方々の名前をそれ以前には一度も聞いたことがなかったのです。アンネマリーはしばしば、かの女が数年間、スイスの有名な寄宿舎学校で過ごしたことを話しました。かの女はすでにフランス語ができたのです。わたくしたちはできませんでした。

そのように、それ以前に見たことがないような社会的かつ文化的に高い水準にある家に足を踏み入れたのだということが、わたくしには分かりました。事実わたくしは、その邸宅における輝きに、さまざまな家具に、使用人たちに圧倒されました。もちろん、かの女は、美しい白い家具とカーテンを備えたかの女自身の部屋を持っていました。（「自分の部屋」という言葉は、わたくしの身近な範囲においてまだ一度も聞いたことがありませんでした。）

アンネマリーの誕生日会に出席していた、合計すると10ないし12人の女の子は同じ洗練された地区から来ていました。その全員がエレガントに着飾り、そして非常に大切に育てられていました。家庭は意識としてはユダヤ人ではありませんでした。自分たちをユダヤ人というよりも、むしろドイツ人であると感じる同化ドイツ系ユダヤ人だったのです。

もちろん、わたくしは素敵な食堂の長い食卓でわたくしたちに給仕された多くのさまざまな珍味佳肴によって感銘を受けました。特に、わたくしは大きなアイスクリームケーキを覚えています。

しかしわたくしにとって一番印象深かったのは、食後のことでした。わたくしたちは音楽部屋に連れられていかれました。「音楽部屋」について少々ご紹介しましょう。それは音楽を聴いたり、自分で演奏したりするための部屋なのです！そのような部屋の存在を、わたくしはそれ以前に聞いたことがありませんでした。そしてそれはすごく広い部屋だったのです。素晴らしいインテリア家具、色彩豊かなオリент風のカー

ベットが敷かれた輝く寄せ木細工の床！そして部屋の真ん中にコンサート用のピアノが置かれていました。家庭教師がピアノの前に座り、何かを演奏し、そして12歳の少女が、それはどのような曲か、そして作曲者は誰かを言い当てねばなりません。ハイドンか、モーツァルトか、あるいはベートーヴェンだったが、それはわたくしでも知っていました。わたくしは、映画館あるいは劇場にいるかのような気持ちでした。

わたくしの両親がガリツィアの小さな町の出身であることを忘れないでください。そこには西洋的文化生活は存在しませんでした。わたくしの父にとって宗教以外に重要なことは何もありませんでした。わたくしの両親は、適切に人生を歩み、そして4人の子どもを育てることができるために、たくましく奮闘しなければなりません。姉は1912年に生まれました。わたくしは1914年に、弟は1916年に、そして妹は1918年に生まれました。最初に戦争があり、それから戦後に無秩序が、インフレーションが、そして続いて不景気がやってきたのです。

後に、わたくし自身良き音楽に触れました。リュウツェウムにはひとりの優れた音楽の先生がいました。かれは学校の向かいにあった教会のオルガン奏者でもありました。学校の合唱団があり、そこでわたくしも一緒に歌いました。その先生は、わたくしに楽器を学ばせ、そしてわたくしを讃美歌の授業に通わせるよう母に促しました。わたくしたちはもちろんピアノを弾くことができませんでした。わたくしたちの住まいには十分にピアノを弾くためのスペースを確保することができませんでした。母は先生の言うことを聞き、音楽教室に行き、そしてバイオリン教室にわたくしの名前を登録しました。わたくしは今日、当時はそのように意識していなかったのですが、母は、多くの有名なバイオリニストが東欧出身であり、そしていくつかのユダヤ人家庭がそれによってすでに大きな名声を得ているゆえにバイオリニストに決めたのだと考えています。当時わたくしは13歳くらいでした。当初、わたくしは真面目に毎日練習をし、そしてわたくしの退屈なエチュードの耳障りな演奏によって家族みんなの頭を混乱させました。およそ1年後、わたくしは突如止めました。そしてそれ以来、わたくしはバイオリンに触れたことがありません。その理由は社会主義・シオニズムのグループでした。そのグループを介して、わたくしはさまざまな社会的・政治的理念を知ったのです。わたくしは、疑わしい才能を育てようとするよりも、読むことや勉強すること、グループのなかで能動的に共同活動すること、何か有用なことに協力することの方がより重要であると考えたのです。

わたくしはさらに若干語らねばなりません。それは、わたくしがすでにもっと早く言及すべきことでした。わたくしは恥ずかしくて発言を控えていたのです。い

つもわたくしはそのことを恥ずかしく思っていました。それどころか今日もまだそうなのです。あなたがわたくしに、わたくしたちの商店がどこにあったのかをお尋ねになったとき、わたくしは、お店が住居に隣接していたと申しました。しかし実際のところ、両方とも、つまりお店も住居も地下にあったのです。それどころか、わたくしたちのように中間階層の下位に位置する人々にとっては、地下で生活しているということは、価値を下げることでした。つまり中間階層の下位の下位なものでした。わたくしは、わたくしたちが地下で暮らしていたことを恥じていたことを打ち明けねばなりません。そのうえ住居は非常に小さく、非常に粗末で、お風呂がなく、そしてそれどころかトイレもなかったのです。わたくしたちは戸外の裏庭にある小屋を利用しなければなりません。リュウツェウムの級友がわたくしたちの商店の前を通り、わたくしがそこに立っているのを見て、そしてわたくしに住まいはどこなのかを尋ねたとき、わたくしたちの住居はお店の上に、つまり2階にあると答えたことを、覚えています。わたくしは、わたくしたちの住まいが地下にあることを認めるには、あまりにも恥じていたのです。そのことは、わたくしがリュウツェウムの級友を家に連れてきたことがなかった理由でもありました。しかし民衆学校の友人たち、そして後にはシオニスト・グループあるいは政治的グループの友人たちは連れてきたことがありました。

マーク：あなたには多くの友人がいたのですか？

ヒルデ：はい。わたくしにはいつも友人がいました。

わたくしは友人たちのところに行き、そして友人たちもわたくしのところに来ました。いずれにせよ、そのことは父には気にいらなかったことでした。友人たちの多くは非ユダヤ人でした。それどころか非ユダヤの若い男たちがわたくしたちのところに来ました。最初から父は、わたくしがかれらの一人と親しくなることを、あるいは後には「ゴイス」《=非ユダヤ人のこと》の誰かと恋愛することを心配していました。父の主な心配はいつも、わたくしが学校あるいは近所で非ユダヤ人の友人をもつことでした。

わたくしたちの住居区画に住んでいたあるユダヤ人家族との出来事を覚えています。わたくしの両親はその家族と親しくしていました。とりわけ母がそうでした。父にとってその家族はあまり正統派ではなかったのです。とはいえその家族はユダヤ教の習慣を忠実に守って暮らしていました。両家の背景は同じでした。両家の両親はともにガリツィアからやってきました。さらにはほぼ同じ時期にです。あちらの父親は靴職人で、こちらの父親は仕立て屋でした。あちらの長女はゴイス（非ユダヤ人）を好きになったことがありました。わたくしは、かの女の母親がわたくしの家に来て、嘆き、とても興奮し、そしてわたくしの母に相談

をしたことを覚えています（わたくしの母はしばしば隣人から相談を求められました。母は確かに公式の教育は受けていませんでしたが、にもかかわらず母は賢明で、思慮深く、そして温かい心の持ち主であるみなされていました。ソーシャルワーカーのように、かの女はいつも、困っている他の人々を助けようとしました。直接実践的に、あるいは女性同士の助言によって、人間関係にもとづく相互理解と感情移入力によって）。それに対して、わたくしの父の反応はまったく極端で、そしてドラスティックでした。父はその少女の父親に、あなたの娘に「カッディーシュ」を唱えるように《つまり、あなたの娘を死んだと宣言するように》助言しました【カッディーシュは「聖なるもの」という意味。礼拝式の終わりに唱える祈祷文。死亡した肉親のために、埋葬の日から11ヶ月間、毎日3回の礼拝と、命日の際に唱える】。もしわたくしたちの1人が当事者だったなら、父はきちんとそのようにしたでしょう。わたくしたち子どもは、そのような父の反応にショックを受けました。少女は最終的に「ゴイス」と結婚したのですが、かの女の家庭は引き続き少女を受け入れました。ところがわたくしの父は、少女の家に行くことを禁じました。その家庭には何人かの子どもがいました。そのなかにわたくしより2歳年長の男子がいました。かれはわたくしたちと共にシナゴググループに参加し、そしてそれどころかしばらくの間、わたくしのボーイフレンドでした。もちろんプラトニックな関係です。

マーク：あなたは当時すでにリュウツェウムで学んでいたのですか、あるいはまだ民衆学校で学んでいたのですか？

ヒルデ：まだ民衆学校で学んでいました。

マーク：あなたは、すでにリュウツェウムにいたときに、まだシナゴググループにも行っていましたか？

ヒルデ：はい、行っていました。しかし事態は別の方向へ進みました。というのは、そのシナゴググループに、わたくしたちをシオニズムに転向させようとする人たちがやってきたからです。

マーク：それはいわば最初の「浸透」でした。2回目はスターリン主義的なものですね（笑）。」

ヒルデ：おっしゃる通りです。2回目はスターリン主義的なものでした。わたくしたちはそれを「赤い同化」と呼びました。

マーク：その言い方、気に入りました。

ヒルデ：わたくしたちのシナゴググループはシオニストたちによって「浸透」され、そしてわたくしたちは結局、シオニスト組織に属することになりました。その組織はユダヤの旗の色彩にしたがって「青-白」と呼ばれました。ただしその組織はその後、社会主義的シオニストによって「浸透」されました。

マーク：ということは3回の「浸透」があったのですか？

ヒルデ：よく考えますと、正確には4回の「浸透」

がありました。すなわち、

- 1) シオニズム
- 2) 社会主義-シオニズム
- 3) 共産主義、あるいはスターリン主義、
- 4) トロツキー主義

4つめはもっとも重要です。それはわたくしがその後になった政治的人間としての育ちにもっとも影響を与えたのでした。そのような育ちは1932年に始まりました。わたくしは当時18歳で、そしておよそその1年足らず前から地区の共産主義者青年同盟のメンバーでした。その全体的成長、つまりある段階から別の段階への成長は集団的な出来事でした。わたくしはあるグループに属し、弟とわたくしの後の夫がそのグループのなかで重要な役割を果たしていました。わたくしたちはロシア革命に関するトロツキーの著書を読みました。最初「2月革命」を、それから「10月革命」。それらはわたくしたちがトロツキーについて調達できたすべてでした。それらの著書のなかでトロツキーは、なぜマルクス、エンゲルスおよびレーニンの理論に抗して、プロレタリア革命が、実際的にはまだ封建的で、工業未発達ロシアにおいてまさに成功したのかを明らかにしていました。そのような事象を説明すべきトロツキーの理論は「複合的発展の法則」と称しました。そして「先駆者の先駆者」であったわたくしたちだけが、それを実際に理解しました。

その際、わたくしたちは、複合的発展の法則の理論をわたくしたち自身の政治的成長にも関係づけました。というのは、まだ青年であったわたくしたちもまた、実に比較的短期間にある段階から次の段階に飛躍したからでした。わたくしたちがその「法則」をわたくしたちの個人的政治的成長に関係づけたのは、決して冗談ではありませんでした。わたくしたちは真剣でした。本当にきわめて真剣でした。わたくしたちは、わたくしたちが歴史のなかで、そこベルリンにおいて果たす重要な役割について確信していました。そしてわたくしたちは、わたくしたちが単なる「客体」ではなく、歴史の「主体」であることに、すなわちわたくしたちが歴史の構成に意識的かつ能動的に協力していることに誇りを持っていたのです... 話がそれてしまいましたね。

マーク：シオニズムによってあなたにとっていわば新しい世界が開かれたという感じがありましたか？

ヒルデ：はい、ありました。最初わたくしをシオニズムの理念がひきつけました《その点については後ほどより詳しく言及される》。しかしその後わたくしを社会主義・シオニズムの理念に熱中させたのは、共同生活、グループ生活、キブツ生活でした。そのような生活を、わたくしたちはベルリンにおいて小規模で実践しようとしていました。例えばわたくしたちがハイキングやその他の共同での企画のために集まるときでし

た。わたくしたちは私有財産を軽蔑し、食べ物を分け合いました。わたくしたちは「青年運動」でした。

マーク：共通の目標を有する友人グループに属することが願いだっただけだ...

ヒルデ：はい。自然への愛はわたくしたちにとってとても重要でした。わたくしたちは皆、大都市の住民でした。街路には樹木はなく、いずれにせよわたくしたちの街路には樹木はなかったのです。もちろんベルリンには公園はありました。しかしかなり遠かったです。わたくしたちは週末をベルリンで過ごすことはせず、いつもハイキングに行き、ドイツの民衆の歌、放浪の歌、つまり1525年のドイツ農民戦争のなかで生まれた歌を歌いました。わたくしたちはその時代のすべての歌が大好きでした。皮肉なことに、革命的な農民たちが歌った歌だけでなく、封建領主のために農民と戦った兵士たちの歌もまた。ただし、わたくしたちは、それだけわたくしたちが若かったこともあり、それらの歌が何を意味しているのかを知りませんでした。わたくしたちはそれらの歌のイデオロギー的意味に関心はなかったのです。わたくしたちはメロディーとロマンチックで、英雄的に響く歌詞だけが好きでした。わたくしたちはそれどころか、政治意識を獲得し、そしてそれらの歌の対立する意味合いを知ってからでもなお、農民戦争の両陣営の歌を歌っていました。

そうです。わたくしたちは大好きでした。ハイキングに行くこと、そして自然の近くにいることが！そしてわたくしたちは幸運でした。というのは、ベルリンは近くに多くの美しい森と湖を有しているからです。その森や湖に、わたくしたちは路面電車、列車あるいはもちろん自転車で、安い交通費で容易に行くことができました。わたくしたちはしばしば長期間のハイキングに出かけました。とりわけ学校の長期休みの期間には。そして一夜を過ごしました。わたくしたちに何かが起こるのではないのかと心配するわたくしの父親の心配をよそに。

あるとき、わたくしたちは大規模なハイキングを企画し、そして家では、土曜日の夕刻、18時までには帰ると言っていました。しかしその時間までに、わたくしたちが戻らなかつたので、わたくしの父は、わたくしたちに何か困ったことが降りかかったのではないかという不安のあまり自分を失ってしまいました。わたくしたちのハイキンググループのリーダーの1人は近所に、つまりレイヘンベルガー街の角を曲がった所に住んでいました。父は、かれが人気者と呼ばれていたことを知っていましたが、しかし父は家の番号は知らなかったのです。それゆえ父は街を行ったり来たりし、大声で「ニンキモノ」と叫び、そしてニンキモノ家の誰かが、わたくしたちがどこにいるのかを知っていることを期待したのです。近所中の人々が父のことを笑いました。さらに父は小さな髭をはやしており、わ

たくしたちの非ユダヤ地区のなかでかなり目立っていました。

マーク：あなたは子どものとき、自分の父親を恥づかしく思っていましたか？

ヒルデ：父は過保護で、過度の独占欲の持ち主で、実に専制的でもありました。

マーク：あなたに対する態度ゆえに、かれのことを恥づかしく思ったのですか、あるいはまたかれがユダヤ人であったからですか？

ヒルデ：その2つの理由からです。

一度、父が、父の言い方では「予感」がしたので、ハイキングに行かせてもらえないことがあったことを覚えています。わたくしたちのきょうだいのなかで、わたくしだけが一緒にハイキングに行かせてもらえなかったのかどうかは、もう覚えていません。いずれにせよ、父はわたくしが家から出ることを許さなかったのです。というのは、父はわたくしの身に何かが起こるという「予感」がしたからでした。その後かなり長期にわたって、友人たちがわたくしをからかいました。「ベルガーのパパは予感しているぞ！」と。

マーク：話題を変えます。あなたの母親の人物について、わたくしたちはすでに若干、教えていただいています。ところで、かの女の旧姓は？

ヒルデ：サラ・フロイントです。

ああ、わたくしが母のことを考えるとき、それゆえに後にわたくし自身のことを恥づかしくしてしまうことが頭に浮かびます。何よりも、母、父そして姉が1943年にゲシュタポによって、他のおよそ5000人のユダヤ人とともにボリスラフから連れ去られ、そしてわたくしが、きっともう再会することはないであろうことを知ってから数年した時期には。

わたくしがまだかなり幼かったとき、一度母と喧嘩をしたことがあります。母の意に反することをしようとしたのでした。ここで、わたくしはあなたに言わねばなりません。母は父に比べるとあまり強くなく、そしてとりわけ宗教的な要件が話題になるとき、あまり熱心ではありませんでした。母はいつも父とわたくしたち子どもの間をとりもとうとし、そして一般的に穏やかで、そして友好的な性質の持ち主でした。その喧嘩で何が問題になっていたのか、わたくしはすっかり忘れていました。しかし母がわたくしへの反対を貫こうとしたとき、わたくしは言いました。「なぜ、わたしはあなたの言うことを聞かないといけなの？あなたが母親だからという理由だけで聞かないといけなの？」そのとき、わたくしはそれどころか、わたくしのその言葉が母にショックを与え、そして傷つけていることに気づいていました。しかしわたくしはそのことを特に注意をはらっていませんでした。ようやく後になって、わたくしは、どんなに深く母を傷つけたのかを理解できました。わたくしの残酷かつ心無い言葉

はそれ以来わたくしの念頭に常にあり、そしていかに後悔しているのかを母に言うことができないのは、わたくしにとって大きな痛みとなっています。

マーク：あなたの母親は父親よりも年下だったのですか？

ヒルデ：はい。14歳年下でした。敬虔なユダヤ教徒であった父にとって、神の御前で、そして聖書に忠実に、良き正統派ユダヤ教徒へと教育できる子どもをもつことは非常に重要でした。最初の妻とは、かれは12年間夫婦でしたが、その後離縁しました。その理由はかの女が子どもを産めなかったからでした。

マーク：第1次世界大戦後の数年間における騒乱や街頭闘争の記憶をまだお持ちですか？

ヒルデ：いいえ。まったく記憶はありません。わたくしの父と母は、当時ベルリンの街頭で起こっていることをわたくしたちから遮蔽しようとしてしました。さらに、両親は近所の非ユダヤ教の子どもたちとわたくしたちが一緒になることを可能な限り阻止しようとしてしました。したがって、わたくしたちは街路ではあまり遊ばなかったのです。それゆえ両親は、わたくしたちがシナゴグ共同体に加わったとき、喜びました。そこではわたくしたちはユダヤ教徒の子どもたちだけと出会い、かつ遊んだのでした。

マーク：だから、あなたはようやく後にベルリンにおけるそれらの出来事について知ったのですね。つまり、あなたが年を重ね、そして人々がその出来事について語ったときに。

ヒルデ：そうです。さらに文献等を読むことで。

マーク：まさにたいへんな貧困の時代でした。そのことについて、あなたは何かを見聞きしていますか？

ヒルデ：ああ、はい。覚えております！わたくしは、父が穀物、小麦およびその他の食糧を買うか、あるいは衣服ないし商店にある品物と物々交換するために出かけたことを覚えています。そのようにして父が得た食料を母は調理していました。とりわけ安息日のためには、それは重要でした。それどころか当時の過酷な時代にあっても、安息日の儀式は維持されねばなりませんでした。それにはまったく一定の食事が属していました。しかもそれもたくさん。わたくしたちは安息日や祝祭日においてはしばしば見知らぬ人をゲストとして招き、さらにわたくしたちより貧しいか、あるいは家庭をもたない人々を招きました。わたくしの両親は、可能な限り豊かで、そして良い食事を与えようとしてしました。父は、わたくしたちが栄養価の高い食事をえることを欲していました。逞しく、健康で、そして病気に対して抵抗力を持ち、そしてそのようにして人生においても成功できるように。そのことは父にとって、(ドイツでは通常である)美しい家具を備えた住居よりも重要だったのです。

マーク：あなたがたの住居はどのような様子だった

のですか？

ヒルデ：わたくしが生まれてから1938年まで、つまり両親がポーランドに追放されるまで、わたくしたちはお店の下にあった住居に住んでいました。そのことについては、わたくしはすでにお話しています。それは地下住居でした。本当に地下住居でした。そこには居間であり、食堂であり、そして両親の寝室でもあった大きな1つの部屋がありました。姉はその部屋のソファで寝ていました。そして妹が生まれた後は、妹は、わたくしが覚えている限りでは、両親と同じベッドで寝ていました。弟とわたくしは、元々はお店の一部であった部屋で寝ました。その部屋は商品の棚によって仕切られていただけでした。お風呂はなく、そしてトイレは中庭のなかの小屋にありました。台所には食器を洗うための冷水のたまった流しがありました。わたくしたちが入浴したいとき、近所の公衆浴場に行きました。そこには浴槽、シャワー、さらにプールがありました。黒色の鉄の蓋と鉄製のリングをもつ3つないし4つの火口を有する大きな煮炊きするためのタイル張りの暖炉もありました。練炭で調理されていました。練炭は居間にあった大きな暖炉を暖めるためにも利用されていました。

母はほとんどの時間を店で過ごさねばならなかったもので、子どもたちのために、そして台所において助けを必要としていました。それゆえ、わたくしたちは非ユダヤ人のお手伝いさんを雇っていました。かの女は店の近くの回廊で寝ていました。しかし母はあらゆるものを自分で煮炊きし、そして焼いていました。というのは、母は自身が厳格に尊重していたダイエット指示をお手伝いさんが守るとは思っていなかったからです。安息日に非ユダヤ系の人々によってなされねばならない一定の家事もまたあります。例えば点灯あるいは消灯です。それらはわたくしたちには許されないことでした。

わたくしが幼児であった頃のことを、今なお思い出すことがあります。我が家は当初はガス灯でしたが、かなり後によりややく電灯になりました。

マーク：お腹が空いていたことを覚えていますか？

ヒルデ：いいえ。わたくしの家族が飢えて苦しんだことはなかったと思います。両親は、しばしば困難な状況ではありましたが、いつも何とかして食料を調達してくれました。しかし、近所の子どもたちから、お腹が空いているという言葉聞いたことを覚えています。

マーク：あなたは何歳だったのですか？

ヒルデ：わたくしが民衆学校に通っていたときですから、6歳から10歳の時期であったに違いありません。わたくしは、子どもたちが何を学校に持参していたのか見ていました。わたくしたちは、ここアメリカ合衆国と違って学校で給食をいただくことはなかったのです。自前のバター付きパンをもって登校しなければな

りませんでした。そして、わたくしは子どもたちが何を食べているのかを見ました。ライ麦パンです。しばしばジャムを塗っただけのパンでしたが、ときにはラードを塗ったものもありました。それはひどい臭いがしました。わたくしは、それが“trefe”【ユダヤ語で、「不浄」の意】であることを知っていました。その臭いがあまりにもひどかったので、わたくしはときおり吐きそうになりました。

わたくしには、食べ物にかかわってもう一つ思い出があります。学校で、わたくしたちはときおり「クエーカーのパン」と呼ばれた小さなパンをいただきました。それは白く、柔らかく、そして甘かったです。固くて、そして皮がカサブタのようになっているベルリンのパンとは違っていました。また、当時わたくしは生まれた初めて肉の缶詰を見ました。「コーンビーフ」と呼ばれていました。

マーク：それはアメリカのある支援組織から贈られた食料品だったのでしょ。

ヒルデ：それについて、わたくしは当時何も知りませんでした。しかし、いずれにせよ外国の食べ物であることは知っていました。というのは、その食べ物は、わたくしがその当時まで食べていたものと異なっていたからです。

マーク：戦争について何か聞き知っておられましたか？

ヒルデ：まったく聞き知ることはなかったです。少なくとも、わたくしは何も覚えていません。戦争について何か聞いていたかもしれませんが、しかし何も思い出せません。

マーク：街路の兵士たちについて何らかの記憶をお持ちですか？

ヒルデ：はい、記憶があります。街を行進する兵士たちを覚えています。わたくしの頭の中にはその時代のある光景が今なお存在しています。兵士たちがわたくしたちの街を行進し、そして当時2歳ないし3歳であった弟とわたくしは店の前で立っていました。弟はとっても可愛く、髪の毛はカールし、美しい目をして、そして頬にはえくぼがありました。兵士の1人が弟を持ち上げ、自分の肩に乗せ、そしてブロックの端のところまで担いでいきました。わたくしは兵士のところまで走り、そして弟を取り戻しました。その兵士は、まるでお人形のような可愛い幼い子どもを気に入り、そして弟も、兵士によって肩に担がれることを喜び、そして誇りに思っていました。残念ながら、その出来事を除くと、わたくしは何も覚えていません。

マーク：皇帝の逃亡、共和国宣言、ヴェルサイユ条約、左翼と右翼の闘いについても覚えておられないのですか？

ヒルデ：その時代については、わたくしの記憶のなかで完全に欠落しています。

マーク：あなたのお父さまは戦争についてお話を

されたことがありますか？

ヒルデ：いいえ。ありません。すでに申しましたように、わたくしの父はかなり一直線な宗教的精神状態の持ち主でした。近所やシナゴグの人々は父を「超正統派」【“Chassiden”はヘブライ語に由来する言葉】と呼びました。現実生活は父の興味をひくことがなく、父は新聞を読みませんでした。父は世界で何が起っているのか、まったく知りませんでした。少なくとも、わたくしは父が戦争について語るのを聞いた覚えがありません。父は1912年に、当時はまだオーストリア領であったガリツィアから移ってきました。わたくしは母が、オーストリア・ハンガリーの君主制と皇帝について語ったことは覚えています。

マーク：インフレーションについて記憶はまだはっきりしていますか？

ヒルデ：はい。インフレーションについて今なおよく覚えています。上がり続けるパン、ミルク、卵およびジャガイモの値段について誰もが話していたのを覚えています。

マーク：商店の前にできた長蛇の列を思い出すことができますね。

ヒルデ：当然です！わたくしは姉あるいは弟としばしば長蛇の列のなかにいました。物価がまたたく間に上昇したことを覚えています。1日ごとどころか、数時間のうちに物価は上がりました。とはいえ、わたくしの両親は物々交換できる商品を持っていました。考えうるあらゆる種類の材料と衣服です。母が、お店においてお金を得たとき、直ちにわたくしたち子どもを食料品購入に行かせたことを覚えています。というのは、1日遅れると、それどころか数時間遅れると、同じお金ではるかに少ない食料品しか得られないか、あるいはほぼまったく得られないということが起こりえたからです。

いま思い出したことがあります。インフレーションが終わったとき、わたくしたちの家にはマルク紙幣の山がありました。何千枚という紙幣で、なんと何十億マルクになるほどでした。しばしばいくつかの0のスタンプが補足的に押されていました。すべてはその間に無価値になりました。しかしわたくしたちはそれらの紙幣を持ち続け、そしてそれらで遊びました。ひょっとしたら、わたくしたちは、その山のようなマルク紙幣がいつか再び価値を持つかもしれないと考えていたのかもしれない。

マーク：しかしより恵まれた親戚もおりだったのですね。そのような親戚はどのような境遇でしたか？

ヒルデ：父の弟は、かれはベルリンのもう一方のはずれに、つまり北部に住んでいたのですが、わたくしたちよりもはるかに恵まれた生活をしていました。かれも宗教的だったのですが、安息日は尊重しませんでした。したがって父とは違っていました。父はそのせ

いどときに仕事のチャンスを逃していたのです。その叔父は多くの従業員とともにかなり成功した工場を持っていました。叔父はわたくしの父とまったく違って、すべてのエネルギーと時間を仕事に注ぎました。わたくしは、しばしば話の中で、父が叔父から布をえたとき、すぐには払えないということを聞いたことを覚えています。また叔母が父を非難していたことも覚えています。「あなたは自分の妻に小包やお金をポーランドの貧しい親戚に送らせているのに、わたくしは自分のお金をなかなか払ってもらえない」と。言いかえると、叔母は、わたくしの母が「かの女の」お金を浪費していると誹謗したのです。さらに、父が友だちから信用貸しをせがまれていたことも覚えています。父は友人への支援を決して拒みませんでした。とはいえ父自身はそれほどお金持ちというわけではなかったのです。さらに、父が貸したお金をときには返してもらえず、そしてお金を失くしたことを知っています。叔父はそのことでも父を非難しました。叔父は父を、他人のことよりも自分の家族のことをもっと考えるように諭そうとしました。

マーク：叔父さんの家をとときには訪れましたか？

ヒルデ：はい。かなり頻繁に。

マーク：叔父さんの家とあなたの方の家の違いに気づきましたか？

ヒルデ：もちろん、気づきました。

マーク：叔父さんたちの食べ物は良かったのでしょうか？

ヒルデ：はい、叔父さんたちは我が家よりもよい物を食べていました。わたくしたちの3人あるいは4人のいとこの誕生日のお祝いは贅沢でした。わたくしたちは家ではいただけないような物を食べました。とはいえ、すでにお話していますように、わたくしの両親は食事において決してそれほどケチではなかったのです。

母は優れた料理人でした。毎週クッキーとケーキを焼いてくれました。両親は厳格にユダヤ教の習慣を守る家庭であろうとし、そしてユダヤ教の習慣通りに食べることができるようにとても努力しました。毎金曜日わたくしたちは、母が生きたまま買ってきて、そし

て自分の手で殺した魚を食べました。母は本物の「ゲフィルテ・フィッシュ」【gefillte Fisch：ユダヤ教徒の伝統的な魚料理のひとつで、「詰め物をした魚」の意だが、魚肉のミートボールやつみれのような形に調理されることが多い。東欧系ユダヤ人には馴染みの深い料理であり、安息日の魚料理の定番でもある】を作りました。かの女は魚の皮をはがし、玉ねぎと玉子をみじん切りにし、それらを魚の皮で包み、そして全体を煮ました。

食事のことを考えると、頭に浮かぶもう一つのことがあります。わたくしの父は、かれは本をまったく読まなかったのですが、栄養に関するまったく素朴な考え方を持っていました。父は次のように考えました。つまりカラス麦は馬にとって良く、そして馬は強い動物であるので、カラス麦は子どもにとっても良いに違いないと。そのようにして父は、わたくしたちがカラス麦粥を食べることを欲したのです。もちろんカラス麦粥を、わたくしたちは食べたくありませんでした。カラス麦粥を、わたくしたちにとって魅力的にするために、わたくしたちは毎晩、カラス麦粥の入った深皿ごとに1個のチョコレートを与えられました。父は、わたくしたちがそのようにして、馬のごとく強くなることを期待したのでした。また父はある人から、肝油が成長中の子どもたちにとってひじょうに重要であるということを知りました。しかし肝油について我が家では、父は思うようにできませんでした。肝油の味があまりにも酷かったので、わたくしたちはそれを飲み下すことを強く拒みました。わたくしはまた麦芽抽出物ももらったことを思い出します。それは、甘くてそしてどろったしたシロップのような飲み物でした。わたくしたちの好物でした。そしてわたくしたちの誰かが病気になったとき、その人は少々のペプシワイン入りの生の卵黄を与えられました。それは鉄分を含み、そしてわたくしたちを強くするはずであると言われていました。わたくしたち全員はそれもまた好きでした。

(この項未完)

(2022年9月12日受理)